

3 学習指導要領実施上の教育課程の研究

～第4期教育振興基本計画を踏まえて～

千葉県立柏中央高等学校長 山崎 寛雄

I はじめに

令和6年度教育課程研究委員会では、第4期教育振興基本計画を踏まえ、未来を見据えた学習指導要領実施上の教育課程の研究として、「探究的な活動の充実」、「ICT等の活用による学び」、「文理横断・文理融合教育」、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」に関する取組と課題について調査・分析を行うこととした。「探究的な活動の充実」については令和4年度から継続して調査しており、経年変化も踏まえた研究とし、他の3つの柱については第4期教育振興基本計画で重要視されている点を踏まえ、その取組と課題を明らかにすることを目的とした。

- (1) 研究主題 学習指導要領実施上の教育課程の研究～第4期教育振興基本計画を踏まえて～
- (2) 調査事項
 - ① 「探究的な活動の充実」に関する取組と課題
 - ② 「ICT等の活用による学び」に関する取組と課題
 - ③ 「文理横断・文理融合教育」に関する取組と課題
 - ④ 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」に関する取組と課題
- (3) 調査方法 Formsによるアンケート調査
- (4) 調査対象 全国の普通科をもつ高等学校（各都道府県3～9校）
- (5) 調査期間 令和6年6月中旬から令和6年7月下旬まで
- (6) 全回答学校数 209校

II アンケート調査結果と考察

1 学校に関する調査

問1

(1) 設置者

ア 国	1	0.5%
イ 都道府県	198	94.7%
ウ 市町村	6	2.9%
エ 学校法人等（私学）	4	1.9%
オ その他	0	0.0%
合計	209	100.0%

(2) 課程

ア 全日制普通科	144	68.9%
イ 定時制普通科	6	2.9%
ウ 通信制普通科	1	0.5%
エ 全日制普通科と定時制普通科併設	17	8.1%
オ 全日制普通科と定時制普通科と通信制普通科併設	1	0.5%

カ 全日制普通科と専門学科または総合学科併設	31	14.8%
キ 定時制普通科と専門学科または総合学科併設	3	1.4%
ク その他	6	2.9%
合計	209	100.0%

問2 本年度の最終学年(年次)での、大学・短大を合わせた進学希望率

ア 90%以上	71	34.0%
イ 90%未満～70%以上	39	18.7%
ウ 70%未満～50%以上	36	17.2%
エ 50%未満～30%以上	35	16.7%
オ 30%未満	28	13.4%
合計	209	100.0%

2 先進的あるいは特色ある教育課程の実施状況について

問3 「探究的な活動の充実」に関する取組と課題について

(1) 「探究的な活動の充実」について工夫していること

ア 教育課程編成	69	10.0%
イ 授業展開(特色ある授業等)	81	11.7%
ウ 教員の指導力向上のための教員研修	46	6.6%
エ 教員の指導力向上のための外部人材の活用	61	8.8%
オ 生徒の活動の充実のための外部機関・人材の活用	157	22.7%
カ 校内組織体制の整備	100	14.5%
キ 施設設備の整備	15	2.2%
ク ICT活用	95	13.7%
ケ 評価(授業評価・学習評価等)	30	4.3%
コ 取組の成果の(都道府県)全体への普及・共有方法	28	4.1%
サ その他	5	0.7%
シ 特に工夫していない	5	0.7%
合計	692	100.0%

(参考)

「探究的な活動の充実」について工夫していること (全回答校数<209校>における回答校の割合)

ア 教育課程編成	69校	33%
イ 授業展開(特色ある授業等)	81校	39%
ウ 教員の指導力向上のための教員研修	46校	22%
エ 教員の指導力向上のための外部人材の活用	61校	29%
オ 生徒の活動の充実のための外部機関・人材の活用	157校	75%
カ 校内組織体制の整備	100校	48%
キ 施設設備の整備	15校	7%
ク ICT活用	95校	45%
ケ 評価(授業評価・学習評価等)	30校	14%
コ 取組の成果の(都道府県)全体への普及・共有方法	28校	13%
サ その他	5校	2%

シ 特に工夫していない	5校	2%
回答校数：209校	回答校数	全体の割合

(2) 特徴的な取組内容があれば上記の中から1つ選び具体的に記述してください。

*約3割の学校が「オ 生徒の活動の充実のための外部機関・人材の活用」の具体的な取組を、約1割の学校が、「イ 授業展開(特色ある授業等)」の具体的な取組を記述。

ア 教育課程編成

- ・1年次から3年次まで同一テーマ同一指導者で探究活動を行っている。途中の年次で変更はしない。指導者は全教員。
- ・時間をかけて取り組みたい時期に、探究の時間を複数配置して対応している。

イ 授業展開(特色ある授業等)

- ・(株) マイナビが提供するLocusを教材として使用し、探究学習に取り組んでいる。年末にはフィールドスタディとして生徒が市内の企業を訪問し、企業に取り組んでいる課題等について調査活動を展開している。
- ・2年生の後半では「総探ゼミ」と銘打って、生徒が興味関心のある分野を選択して、教員のゼミ形式で探究活動を行い、探究結果を発表(1年生はオーディエンス)することを実施している。
- ・環境科学コースにて、校内のビオトープを活用し、地域も巻き込んだ特色のある授業展開を実施し、生徒が主体的に学ぶ探究活動につなげている。
- ・教科融合授業：社会的課題などを、複数の教科・科目の観点から多角的に考え、問題解決する能力を育むことを目的として、令和元年度から教員間で議論して教材開発を続けている。令和5年度は、「近代化と進歩 ～歯の健康を通して～」(家庭・数学・歴史・化学・英語・養護)という授業を作り上げた。各教科等での学びを総動員するため生徒にも教員にも刺激になる。この取組は一般社団法人『学びのイノベーション・プラットフォーム(PLIJ)』(東京大学生産技術研究所内)にもSTEAM教材(コンテンツ)として提供している。県全体の中堅研の場でも毎年共有している。
- ・多文化共生科と普通科のクラスを解いたチーム編成し、外国人生徒も普通科の生徒とグループ活動を行う。
- ・地域探究を柱に、地域に貢献する人材育成を目指している。生徒は、フィールドワーク等を通して、地域の課題を発見し、地域の人材と密に接し学習している。
- ・民間会社作成の探究プログラムのモニター校となり、業者と連携しながらプログラムのブラッシュアップに努めている。

ウ 教員の指導力向上のための教員研修

- ・大学教授による職員研修を行っている。探究活動における問いや課題意識の持たせ方、深い学びを実現する具体的な評価についての研修を行った。

エ 教員の指導力向上のための外部人材の活用

- ・3学年の総合的な探究の時間でゼミナールを実施。その中で、ゼミごとの指導者を大学・専門学校の教授等に依頼。
- ・連携協定を結んでいる大学から教員を派遣してもらい、探究学習に関わる調べ方・学び方について、教員研修と生徒への講演会を実施している。同じ講師からのレクチャーであるため、教員・生徒の理解は根底で共通しており、その後の活動がスムーズに行えている。(オ 生徒の活動の充実のための外部機関・人材の活用)としても報告)

オ 生徒の活動の充実のための外部機関・人材の活用

- ・「大人と話そう」というイベント。域内で働く大人を講師に招き、講師1人を生徒複数人で囲み会話をしながら、コミュニケーション力の向上、総合的な探究における課題の発見、地域との人脈作り等を

目的に実施している。

- ・ユニクロとコラボしての「服のカプロジェクト4」
- ・経済産業省採択のタイムタクトを活用している。(無償)
- ・学校が所在する地域に生徒が出向きフィールドワークを行って聞き取り調査を実施し、地域の実態から課題を発見する探究活動を、大学の先生の指導も受けながら行っている。発見した課題の内容に応じて組んだグループで協働的に探究活動に取り組む際には、必要な知識や技能を身に付けるためのファシリテーター的な役割として、地域の産・官・民それぞれの立場の方々にも参加をしてもらっている。探究の成果は校内外において発表し、上記の方々には評価にも当たってもらっている。
- ・起業家教育をサポートする外部機関と連携し、観光地のプロモーションに関する取組等を実施している。
- ・地元の大学生をファシリテーターにした課題研究や大学生メンターの支援による探究活動を行っている。
- ・有志生徒がフェアトレード（コーヒー事業）について学ぶため、ラオスや鹿児島県の徳之島の方々などとオンラインで結び、研修と交流を行っている。また、徳之島には実際に赴き、コーヒーの収穫体験や農園の方からの講習を受けた。地元施設等でのコーヒー販売も行った。(ク、ICT活用としても報告)

カ 校内組織体制の整備

- ・「キャリア探究プロジェクト」という教員グループを中心にして、プレゼンテーションを中心とした探究活動と進路指導を組み合わせた流れを検討しながら実施している。
- ・次年度以降に向けて、より探究的な活動が取り入れられるように将来構想検討委員会を立ち上げ、検討を進めている。

キ 施設設備の整備

- ・探究ルームの整備を行った。

ク ICT活用

- ・一人1台端末を活用し、Web上で広く情報収集する、他者の考えに触れる、自己の考えを相対化する過程を経て、深化する活動を行う。
- ・探究的な活動の充実のため、生徒にどんな活動をしてもらうか、内容のポイントごとにあらかじめ教師の思い、取り組み方を動画で撮影し、その作成したファイルのリンクを各クラスの電子黒板にキャストして配信している。また、Googleアプリのスプレッドシートやジャムボード、formsを活用することで、生徒の探究活動における情報共有や意見交換などが活性化している。

ケ 評価（授業評価・学習評価等）

- ・県の指定校事業「教育課程開発校 学習評価」の取組において、第3観点の「主体的に学習に取り組む態度」について、主に研究を進めている中で、この観点の評価を見取るためには、各教科特性に応じた発展的かつ探究的な授業展開が必要であり、組織的に研究討議等を進めている。

コ 取組の成果の（都道府県）全体への普及・共有方法

- ・全校で行う探究活動（課題研究）について、学校外の方々も招待して、3年次に全員がその成果等を発表する探究活動発表会を開催している。

サ その他

- ・1970（昭和45）年度から自分の興味関心ある課題について学びたいという生徒の要望から始まった「自由研究」が続いており、生徒自らがテーマを設定し、1年間で論文に仕上げ、優れた論文を紀要集としてまとめている。

(3) 「探究的な活動の充実」についての課題とその解決に向けた取組について記述してください。

記述から6つの項目に整理した。

A 教員の負担と研修

課題

- ・教員の負担が大きい
- ・良い研修・指導者が見つからない
- ・教員の指導力の差
- ・教員によって探究活動への熱心さに差がある

解決に向けた取組

- ・教員研修の充実
- ・教員研修会の開催
- ・研修で探究型授業の先進校を視察
- ・総合探究委員会の設置
- ・校内研修等を通じた実践事例の共有

B 生徒の主体性と探究力の向上

課題

- ・生徒の主体性が育っていない
- ・生徒がテーマ設定や課題設定に難しさを感じる
- ・調べ物学習にとどまり、深い探究的な活動になっていない

解決に向けた取組

- ・探究推進部の設置
- ・教員の指導力向上研修
- ・生徒の探究テーマと外部人材のマッチング
- ・生徒の興味・関心を引き出す内容にする

C 組織的な取組とカリキュラム

課題

- ・学年任せ、担当者任せの傾向
- ・学校全体としての組織的な取組が未成熟
- ・必要時数が多く、内容の精査が必要

解決に向けた取組

- ・総合探究委員会の組織化
- ・年度毎の探究活動内容の見直し
- ・総務部学習支援担当の設置
- ・体系的なカリキュラムの開発
- ・学校全体の指導体制の確立

D 外部との連携

課題

- ・外部の支援に頼っている
- ・地域や外部機関との連絡調整が多忙
- ・調査研究の時間及び活動範囲の制約

解決に向けた取組

- ・外部講師（地域住民）の確保、講師選定委員会の実施
- ・地元市役所との協働
- ・社会人聴講生との協働
- ・地域の大学と連携し、アドバイスを受ける体制を整備

E 探究活動と進路指導

課題

- ・進路との関連が薄い
- ・探究的な活動の成果を進路に繋げることが難しい

解決に向けた取組

- ・探究活動を大学の総合型選抜試験に繋げる体制の充実
- ・総合探究委員会によるカリキュラム開発

F 時間の確保と評価

課題

- ・探究活動の時間的確保が困難
- ・探究活動の評価方法が不明確

解決に向けた取組

- ・探究活動時間を放課後や長期休業中に確保

《分析・考察》

探究的な活動の充実に向けた課題と解決策を整理した結果、いくつかの重要なポイントが浮かび上がった。まず、教員の負担と指導力の差が大きな課題である。探究活動の準備や指導には多くの時間と労力が必要であり、教員の負担が増加している。これを解消するためには、教員研修の充実が不可欠である。研修を通じて、教員が探究活動を効果的に指導できるようにすることが求められる。また、実効性のある有意義な研修の実施とそのための指導者の確保も重要であり、外部の専門家を招くことも有効である。

次に、学年や担当者任せになっている現状が課題である。探究活動が一部の教員や学年に依存しているため、学校全体としての統一的な取組が不足している。これを改善するために、総合探究委員会等の設置が必要である。委員会主導で組織的・系統的な実施体制を確立し、学校全体で統一された指導を可能にする。また、体系的なカリキュラムの開発も重要である。カリキュラムを通じて探究活動の内容を一貫して提供し、各学年での取組がスムーズに引き継がれるようにする。

生徒の主体性を育むためには、外部講師や地域との連携を強化し、実践的な学びを提供することが効果的である。地域の大学や市役所と協働し、外部講師を確保することで、生徒が実際の問題解決に取り組む機会を増やすことができる。また、社会人聴講生との協働も、生徒にとって多様な視点を学ぶ良い機会となる。

探究活動を進路指導に繋げるための体制づくりも重要である。大学の総合型選抜試験との関連性を高めることで、生徒の探究活動が進路に直接結びつくようにする必要がある。これにより、生徒の学習意欲が向上し、探究活動が進路選択の一助となる。また、探究活動の成果を評価するための基準の明確化も必要である。評価基準を明確にすることで、生徒が自分の成長を実感しやすくなる。

最後に、探究活動の時間的確保も課題である。授業時間内で探究活動を十分に行うためには、時間割の見直しや放課後、長期休業中の時間を活用する工夫が必要である。これらの取組を総合的に実施することで、生徒の深い学びと自主性を促進し、探究的な活動の充実を図ることができると考える。

問4 生徒の「ICT等の活用による学び」に関する取組と課題について

(1) 生徒の「ICT等の活用による学び」について工夫していること

ア 教育課程編成	3	0.6%
イ 授業展開(特色ある授業等)	90	18.5%
ウ 教員の指導力向上のための教員研修	128	26.3%
エ 教員の指導力向上のための外部人材の活用	38	7.8%
オ 校内組織体制の整備	85	17.5%
カ 施設設備の整備	77	15.8%
キ 評価(授業評価・学習評価等)	31	6.4%
ク 取組の成果の(都道府県)全体への普及・共有方法	8	1.7%
ケ その他	18	3.7%
コ 特に工夫していない	8	1.7%
合計	486	100.0%

(2) 特徴的な取組内容があれば上記の中から1つ選び具体的に記述してください。

ア 教育課程編成

(普通科について記述した都道府県なし)

イ 授業展開（特色ある授業等）

- ・学習支援ソフト（ロイロノート・Classi ノート・MetaMoJi 等）を活用
- ・タブレット端末とスタイラスペンを使った「ノートと鉛筆を使わない授業」で教師の講義を短縮
- ・授業で1人1台端末を活用した個別学習（ドリル）の時間を設定
- ・学び直しを目的とした学校独自科目でデジタル教材を活用、生徒個々の学力に応じた学び直しをサポート

ウ 教員の指導力向上のための教員研修

- ・校内研修を定期的で開催して好事例を共有
- ・県から配置されている ICT 支援員による校内研修等を実施
- ・相互授業見学の機会を設定、授業のアイデアを共有
- ・年度初めに異動者を含めて職員研修を開催、学校で導入しているツールを説明

エ 教員の指導力向上のための外部人材の活用

- ・ICT 支援員による校内研修の実施
- ・県教委から指導主事が定期的に学校を訪問、ICT 活用について指導
- ・外部指導者によりロイロノート・MetaMoJi 等の講習会を開催
- ・企業と連携して、生成 AI の授業での活用について研究

オ 校内組織体制の整備

- ・新たに委員会等を設置（ICT 委員会・DX 推進委員会・授業改善委員会・ICT 教育推進部・情報 DX 課ほか）を設置
- ・PC リーダーを複数名配置
- ・情報管理課、教務課による情報提供や研修の実施
- ・情報部が ICT 機器を管理し活用を推進

カ 施設設備の整備

- ・コロナ禍以降、ほぼ全教室にプロジェクタとスクリーン（簡易式ホワイトボード）を設置
- ・すべての教室の黒板を撤去してデジタルホワイトボードを設置
- ・すべての普通教室と特別教室に電子黒板を整備
- ・地域内の小中学校と高校をリアルタイムで結ぶ機器の設置を DX ハイスクール予算で計画中

キ 評価（授業評価・学習評価等）

- ・フォームによる小テストや授業等の振り返り等を実施
- ・学習時間記録アプリを用いて毎日生徒が学習時間を入力し、学習に対する取組状況を客観的に把握
- ・評価の中にスタディサプリの各自の取組状況を加味

ク 取組の成果の（都道府県）全体への普及・共有方法

（記述した都道府県なし）

ケ その他

- ・生成 AI の活用や「Classi」の導入で1人1台端末の活用による個別最適な学びを推進
- ・韓国、台湾の高校とのオンライン交流活動を実施
- ・R 7 から単位認定を可能とする遠隔授業の受信校となる予定、R 6 年度は夏季・冬季課外でトライアル配信を受ける予定
- ・入学後登校ができずに令和 6 年度に 4 年次以上を迎える生徒を対象に、学習機会の保障として遠隔授業を実施

（3）生徒の「ICT 等の活用による学び」についての課題とその解決に向けた取組について記述してください。

A 教員間のスキル差等

- ・教員の ICT 活用スキルの個人差が大きいいため、校内研修で全体的なスキルアップが急務
- ・教員の年齢層により ICT 活用の取組に差があり、意欲的な若手中心に活用実践を積み上げていくことが大切
- ・教員の ICT 活用が「教材の提示」にとどまり次の段階に進んでおらず、教科内で新たな取組の共有が必要

B 教員の意識改革等

- ・ICT 機器は教師の「教える道具」というより生徒の「学びの道具」だという認識が不足
- ・「ICT 等を活用した学び」から「学びの中での ICT 等の活用」への意識転換が必要
- ・教員は板書代わりのプロジェクタ利用で ICT を活用していると錯覚、教材開発をするまでに及んでいない現状

C 教員研修等

- ・校内授業公開（相互授業参観）週間を設定して、教員間でアイデアを共有
- ・電子黒板での教材の提示などにとどまらず、生徒が ICT 端末で主体的・協働的な学びにつなげる授業の研修が重要
- ・生徒の理解を助けるための ICT 活用だけでなく、生徒の学びを深めるための ICT 活用に向けて教員の研修が必要

D 活用の工夫等

- ・ICT 活用を「思考・判断・表現」の育成につなげるため、1 人 1 台端末を使ってアウトプットする活動を増やすよう工夫
- ・反転授業で ICT を活用し、生徒が家庭で学習したことを、学校の授業では協働的な学びで解決することが可能
- ・学習用ソフトを用いた家庭学習を課すことで、タブレット端末の家庭での活用を推進

E 個別最適な学び等

- ・個別最適な学びと協働的な学びの一体化を実現できるよう、それぞれ ICT 活用の効果的な取組を研究中
- ・生徒の学力に差があるクラスでの個別最適な学びにつながることを意識して、ICT を活用した授業の工夫を研究中
- ・それぞれの生徒の学習到達状況等に応じた「個別最適な学び」の実現のため、スタディサプリの導入と活用を推進

F 生徒の現状等

- ・生徒自身に ICT を使うことで学びが深まることを理解させることが課題
- ・タブレット端末を学校に持ってこない生徒が多かったため、タブレットを活用しなければならない授業づくりを推進中
- ・家庭によっては Wi-Fi 環境が整っておらず、ICT を活用する家庭学習課題の出し方を検討する必要

G 家庭の事情等

- ・経済的理由によりタブレット端末を購入することが困難な家庭が多数
- ・学校貸与の 1 人 1 台端末は校外持ち出しを禁止しているが、生徒が自宅でも活用できるようルールを検討中
- ・Wi-Fi 環境がない家庭が一定数あり、1 人 1 台端末を家庭に持ち帰って活用するのは困難

H 通信環境等

- ・学年（年次）全体で一斉にタブレット端末を使用すると、速度が落ちる（固まる・通信が途絶える）など、ネットワーク環境が脆弱

- ・有害サイトをブロックするフィルターが強すぎて閲覧できないサイトが多く、生徒の情報収集に支障
- ・数学で記号を使用して作業できるアプリの導入を要望中

I 1人1台端末等

- ・タブレット端末の充電が一日持たないため全授業で活用することができず、その日の使用科目の交通整理が必要
- ・生徒の学習用端末が統一されていないため指示がしづらく、学校で端末を指定するよう検討中
- ・一斉導入された電子黒板等に不具合。メンテナンス及び更新にかかる費用の予算化が必要

J その他

- ・ハード面、ソフト面で機器がうまく起動しない生徒のサポートで授業の進行が停滞
- ・中学校での ICT 活用状況を職員が把握できておらず、ハードもソフトも高校と異なるため連携に課題
- ・ICT 支援員が不足している状況、大学生チューターの活用を検討
- ・大学受験への対応で余裕がなく、高学年になると1人1台端末の活用が少なくなる状況
- ・ICT の活用が、生徒の学力や主体性の向上、確かな学びにつながっているか、検証が必要

《分析・考察》

コロナ禍以降、各学校の Wi-Fi 環境や生徒用1人1台端末の整備が急速に進む中、ICT 等を活用した学びについて各校ともさまざまな工夫を施していることが調査結果からうかがえた。授業展開等における活用の仕方として、①学習支援ソフトの反復学習機能を生かした学びの定着 ②学習の進捗管理や迅速なフィードバックを行うことで、学習成果の可視化に活用 ③AI を活用した各自の学習到達状況に応じた学びの提供 ④学習へのアクセスの柔軟性を生かした家庭学習の促進と反転学習への利用 ⑤双方向の機能を活用した協働的な学習への活用など、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実のため最大限に ICT を利活用している報告があった。

「ICT 等の活用による学び」について工夫している最も多い取組は「教員の指導力向上のための教員研修」で、好事例を紹介する校内研修の定期的な開催、ICT 支援員による研修、相互授業見学の機会設定などが行われており、全教職員の ICT スキルの底上げを図ったものが多い。翻ってこのことは ICT 活用の課題となっている。研修が重要視される背景として、教員間のコンピュータスキルや、年齢層による ICT 等の利活用の取組の差があったり、プロジェクタを使用することを ICT 活用と錯覚し教材開発に及んでいなかったりするなど、教員の意識の問題が依然としてあることが指摘できる。これらの人的リソースの問題解決のために、学校長として校内研修の充実に腐心する姿がうかがえた。

その他、「ICT 等の活用による学び」についての課題は、教育現場での技術的、組織的、教育的な側面から家庭の問題まで多岐にわたっている。技術的な課題としては、同時に多くの生徒がネットワークを使用する場合に通信速度が低下するなどのインフラの整備不足、組織的な課題としては、技術・専門スタッフが不足するなどの校内のサポート体制不足、家庭の問題として経済的な事由による情報端末を購入できない生徒が少なからず存在していることである。

第4期教育振興基本計画において、ICTの活用が教育の質を向上させるための重要な柱として位置づけられているが、一方で教員のスキル差や設備の整備、家庭の事情など多くの課題が存在する。これらの課題を解決するためには、継続的な教員研修と意識改革、施設設備のさらなる充実が必要であり、校長が果たす役割はとて大きいと言える。

問5 「文理横断・文理融合教育」に関する取組と課題について

(1) 「文理横断・文理融合教育」について工夫していること

ア 教育課程編成	75	25.2%
イ 授業展開(特色ある授業等)	65	21.8%
ウ 教員の指導力向上のための教員研修	20	6.7%
エ 教員の指導力向上のための外部人材の活用	9	3.0%
オ 校内組織体制の整備	18	6.0%
カ 施設設備の整備	2	0.7%
キ ICT活用	27	9.1%
ク 評価(授業評価・学習評価等)	6	2.0%
ケ 取組の成果の(都道府県)全体への普及・共有方法	6	2.0%
コ その他	70	23.5%
合計	298	100.0%

(2) 特徴的な取組内容があれば上記の中から1つ選び具体的に記述してください。

ア 教育課程編成

- ・文理横断・文理融合に向けた学校設定科目の設定
リベラル・アーツ、情報ライフデザイン、田尻の環境、体験学習基礎、教養、課題探究、未来探究、理系探究、文系探究、理科研究(文系クラスの選択科目)、研究Ⅲ等
- ・1年次に「理数探究基礎」を全員履修
- ・3年次に「数Ⅲ」を全員履修
- ・「総合的な探究の時間」を週2時間実施
- ・文理でクラス分けをせず、自由に科目を選択できるようにしている。

イ 授業展開(特色ある授業等)

- ・「総合的な探究の時間」で、意識的に文理横断テーマを設定させる。
- ・合同授業(世界史・物理合同で「蒸気機関」についての授業、など)の実施
- ・国語のディスカッション授業において、テーマに応じて他教科の教員がT.T.で入る
- ・大学と連携した体験プログラムの実施

ウ 教員の指導力向上のための教員研修

- ・公開授業研究会の実施
- ・教員養成系大学と連携した研修の実施

カ 施設設備の整備

- ・DXハイスクールの活用

キ ICT活用

- ・「総合的な探究の時間」における端末の活用

コ その他

- ・特に工夫していない。
- ・「文理探究科」の設置
- ・「グローバルサイエンスコース」の設置

※エ、オ、ク、ケについては具体的な取組の記述なし

(3) 「文理横断・文理融合教育」についての課題とその解決に向けた取組について記述してください。

【課題】

A 教員の理解不足・指導力向上(先行事例の不足)

- ・文理横断や文理融合教育にまで意識が及んでいないことが課題
- ・教員のやる気や価値観など属人的な部分が多く、単発的イベント的になりやすい。
- ・探究活動に係る指導力の向上が大切
- ・具体的実践例や成功事例の教示が必要
- ・横断や融合における実践例やその効果等について、校内研修が必要

→（解決に向けた取組）

- ・先進実践校の教員を講師として教員研修を計画
- ・大学教授等による研修を計画
- ・校内でプロジェクトチームを編成し、県内外の事例を収集し、授業への展開を模索中
- ・文理融合教育の実践例を集め、「実践例データベース」を作成

B 教育課程の見直し

- ・特定教科ではなく、全体での指導計画を見渡した上での実施計画となるので、カリキュラム・マネジメントによる計画作成が重要
- ・限られた単位数の中で既成科目のほかに新たな学校設定科目を開講することは困難

→（解決に向けた取組）

- ・選択科目の多様化・工夫
- ・総合的な探究の時間において、文理の枠にとらわれずデータサイエンスを活用した取組を推進。現在、データサイエンス教育を行っている近隣大学と連携し、授業開発を行う体制を構築しているところ。
- ・意識的に行っていないが、総合的な探究の時間でのテーマ学習において、同様の効果が得られるよう、評価規準を事前に提示
- ・総合的な探究の時間で教科学習との往還
- ・キャリア教育の充実、STEAM教育の導入

C 教員配当数の不足、負担増加

- ・教員が生徒指導をはじめとして日頃の業務に負担が大きいと感じており、教科の枠を超えての指導は総合的な探究の時間程度
- ・教育課程の編成やティームティーチングなど教職員の質と数の確保が大切
- ・教員が、教科横断の科目について負担感から及び腰、否定的になっていることが課題

→（解決に向けた取組）

- ・コーディネーター的な人材配置

D 学習内容が増え、生徒の負担増加

- ・基礎的な学力の定着が課題であり、文理横断・文理融合教育まで進めることは難しい。
- ・文理横断や文理融合教育の必要性は感じるが、生徒の科目選択のニーズを考えると、なかなか設定が難しいと感じている。

E 大学受験対応の優先

- ・進路実現に向けては、大学受験のこともあり、文系・理系進学 of 生徒はそれぞれの系列科目中心の選択になる傾向が強い。
- ・大学入試を意識した教科指導において、教科内の指導内容に閉じてしまいがちになることが課題

F 学校の施設・設備が不十分

- ・文理横断を意識したカリキュラムの検討を行ったが、学校施設、現在の教員配置の状況から断念

※（解決に向けた取組）としてBに前述の総合的な探究の時間、キャリア教育の充実等は、既存の枠組を生かした工夫であり、新たな負担が抑えられると考えられることから、C、D、Eの解決に向けた取組とも考えられる。

《分析・考察》

「文理横断・文理融合教育」について工夫していることとして、最も多い回答は、「教育課程編成」で25.2%であった。具体的な取組としては、特色のある学校設定科目が目立つが、そもそも文理のクラス分けをしていないという学校も一定数見られた。次に多かった回答は「その他」で23.5%あり、このうちのほとんどが「特に工夫していない」と読み取れるので、高校における「文理横断・文理融合教育」への取組は、全体へは広がっていないことがうかがえる。

「文理横断・文理融合教育」の推進には、多くの課題が見受けられ、教員の理解不足が顕著である。また、教員の負担感や授業時間の制約も大きな障害となっている。一方、大学受験を意識した文理選択が生徒の選択を狭め、文理横断的な学びの実践が困難になっているという指摘も見られる。一部の学校では、学校設定科目や「総合的な探究の時間」等を利用して、教科横断的な学びを進める取組が行われているが、まだ十分とは言えない。今後は、教職員の意識改革を進めるための研修や、具体的な実践例の共有が重要であり、データサイエンスなど文理融合の学問を導入し、探究活動の中で文理両方の視点を取り入れることで、生徒の学びを深化させることが期待される。

問6 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」に関する取組と課題

(1) 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」について工夫していること

ア 教育課程編成	33	7.0%
イ 授業展開(特色ある授業等)	107	22.8%
ウ 教員の指導力向上のための教員研修	60	12.8%
エ 教員の指導力向上のための外部人材の活用	16	3.4%
オ 校内組織体制の整備	45	9.6%
カ 施設設備の整備	13	2.8%
キ ICT活用	124	26.4%
ク 評価(授業評価・学習評価等)	35	7.4%
ケ 取組の成果の(都道府県)全体への普及・共有方法	3	0.6%
コ その他	15	3.2%
サ 特に工夫していない	19	4.0%
合計	470	100.0%

(2) 特徴的な取組内容があれば上記の中から1つ選び具体的に記述してください。

ア 教育課程編成

- ・ 定時制、単位制のメリットを生かした生徒個々の時間割が存在
- ・ 少人数制授業やT T授業の展開
- ・ 生徒の進路希望に合わせた多様な選択科目
- ・ 少人数学級編制や少人数習熟度別授業
- ・ 基礎・基本の定着、学び直しを目的とした学校設定科目
- ・ 普通科に学際探究、地域探究、スポーツ探究の3コースを設置

イ 授業展開(特色ある授業等)

- ・ 「総合的な探究の時間」における個人やグループでの課題研究
- ・ 協働的な学びの時間確保のため、1コマ65分授業を展開
- ・ ICTの活用による個別最適な学びとグループ活動における協働的な学び
- ・ 少人数学習による個々の進捗把握と課題設定

- ・1年次「理数探究基礎」の全員履修
- ・T.T.授業や分割授業による個別最適な学びの実践
- ・個別に考える時間とグループ、ペアで活動する時間の確保
- ・合理的配慮事項の全体共有と学習評価等における個々に配慮する生徒の情報共有
- ・集団不適應を抱える生徒が多く、協働的な学習の展開に苦慮している。
- ・対話的で深い学びを意識し、生徒との問答を通して思考を深化させる工夫
- ・数学における5～6人グループによる反転授業の取組
- ・「学び直し」の時間の確保
- ・スタディサプリの活用
- ・学校設定科目の設置（「マルチベーシック」、「キャリアマネジメント」等）
- ・文化研究の授業内で行われる外国人を案内（姫路城）する実践授業
- ・単位制の特徴を生かし、個人のニーズに合わせたカリキュラム作り

ウ 教員の指導力向上のための教員研修

- ・校内における授業公開、授業見学期間の設置とその後の教員間における意見交換会

エ 教員の指導力向上のための外部人材の活用

- ・国立教育政策研究所の統括研究官を招いた研修会の実施
- ・外部人材の活用により、生徒の探究が深まり、協働的な学びに繋がっている。

オ 校内組織体制の整備

- ・「共に学ぶ」県教育委員会事業との連携
- ・授業力向上プロジェクトチームを立ち上げ
- ・近隣小中学校および大学との4校種による学習支援活動を中心とした交流事業の展開
- ・授業後に進路希望者向けのスタディールーム開設

カ 施設設備の整備

- ・なし

キ ICTの活用

- ・BYODによる1人1台タブレット（生徒、保護者による用意）
- ・1人1台端末の導入により、協働的な作業をする活動が増えた。
- ・外部からの使用料支援によるアプリ使用
- ・ロイロノートの活用
- ・学習支援サービス（スタディサプリ、Classi、スタディサポート等）を活用しての個別最適な学びができる環境づくり
- ・外部コンテンツの積極的な活用
- ・海外大学生とのオンライン通信授業
- ・生徒同士の成果の共有やルーブリックを用いた自己評価
- ・民間のソフト等を活用して、朝10分学習を展開
- ・既成(学習プラットフォーム)またはオリジナルのデジタルコンテンツの活用
- ・ジャムボードを活用しての協働学習

ク 評価（授業評価・学習評価等）

- ・一部教科・科目で定期テストをやめ、単元テストやパフォーマンステストに切り替え

ケ 取組の成果の(都道府県)全体への普及・共有方法

- ・なし

コ その他

- ・Schola活動と称して、学校外からの様々な教育活動の要請について参加可能としている。

(希望生徒は、通常の授業を出席扱いで参加)

- ・ 発展学習のための補習や基礎学力充実の補充授業を放課後に実施
- ・ 学び合いの実施
- ・ P T A主催の職業講演会の実施
- ・ 商業科の課題研究において、地域の協力により個別の学びを深めることや地域との交流による協働的な学びの実施
- ・ 校内実力テストにおける出題の工夫

(3) 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」についての課題とその解決に向けた取組について記述してください。

A ICT 活用

- ・ ICT 機器を使用しての共同編集を行うが、まだ限定的である。
- ・ スタディサプリを導入して、生徒が個別に学習ができるよう支援している。また、ICT を活用しながら話し合い、学び合い等が活発にできる機会を設定している。
- ・ ICT を活用した個別最適な学びを推進するしか見いだせていない。
- ・ ICT の効果的な活用が必須である。
- ・ 生徒の学力差が大きいため、業者による教育支援ツールを活用し、Web テスト等で個々の理解力に応じた問題を解かせている。
- ・ ICT 機器の活用におけるソフト面の費用が課題であるため、費用に見合う進路実績が出せるよう取り組んでいる。
- ・ 「個別」であること自体が目的化し、表面的な浅い学びに陥ってしまう。生徒に端末を持たせておくだけで自然に個別最適な学びが成立すると思ってしまう場合がある。
- ・ ICT を最大限活用することが必要であり、校内のW i - F i 環境の追加整備が課題
- ・ 普段の授業での ICT 活用率の低さ
- ・ 一体化の充実には ICT の利活用は必須であるが、ICT の活用能力の個人差が課題
- ・ 教員の ICT 活用能力により、授業の質に差が出る可能性がある→職員研修の充実
- ・ ICT 機器のセキュリティや不具合等の対応を考える必要もある→外部支援員の活用
- ・ 教員の ICT スキルが課題
- ・ アプリが十分に揃っていない。揃えるための費用が必要。通信環境の整備も必要
- ・ 特性のある生徒同士は直接的な協働が苦手であるが、ICT の活用がトラブルの軽減に繋がっている。

B 教員の意識改革および指導力

- ・ 個別最適な学びが求められ、協働的な学びとの一体的な充実がなぜ必要なのかについて教員の正しい理解が必要であり、先進的な取組事例の研修等を行う。
- ・ 取組度合いについて教科間で差が見られる→公開授業週間や校内研修の実施
- ・ 教員の指導力が課題。これまで経験がないことに挑戦していく意欲を喚起するため、面談を通して、一人一人にミッションを与えるなど働きかけている。
- ・ 教員個々の、授業計画づくり段階での意識の持ち方が課題→校内外の研修への参加促進
- ・ 教員の考え方の温度差→優秀な授業実践の情報共有を図る。
- ・ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実の目的等について、教員研修が必要。
- ・ 受験指導に軸足を置いた指導が多く、個別最適な学びを取り入れる余裕がない。
- ・ 個々の授業の中で取り組んでいるが、学校として取り組むところまで至っていない。組織的な授業改善の研究の中で取組を進める。
- ・ 教員の資質向上が課題→教員研修が急務。

- ・一斉講義型から抜け出せない教員がいる。→教員研修に力をいれる。
- ・教員の意識不足、理解不足、指導力の差（多数回答）→校内研修、事例研修等の実施

C 教員の配置や働き方、設備面等

- ・教員が忙しく、職員研修の時間がとれない。→問題解決に向け検討中
 - ・授業改善プロジェクトチームを立ち上げたが、研修の時間が取れない。
- 会議、研修の日程確保のため、週1～2日を5時間日課とした。
- ・個別最適な学びに十分対応するためには時間と人手が必要。
 - ・職員数の不足と非常勤講師の増加
 - ・教職員が十分に配置されていない（欠員を含む）現状がある。
 - ・個別最適な学びの推進のためには、教員のマンパワーに頼らざる得ない側面がある。
 - ・教員配置や施設面での限界がある。
 - ・人員の確保と業務量の増加（複数回答）

D その他

- ・一定の到達度が求められる共通テスト対応が優先される。
- ・個別最適な学びは実現しているが、協働的な学びとの一体的充実が課題
- ・45分7時間から50分6時間へ変更したため、教科書を進める時間以外に、個別最適化学習の時間を確保することが難しい。
- ・生徒が主体的にアプリを活用していこうとする意識の啓発が不十分である。
- ・基礎的な学力の定着が課題であるが、グループワークを取り入れることにより、生徒の理解度が高まっているように思われる。
- ・協働的な学びは、小中学校の取組が充実しており、その手法について生徒は慣れている。
- ・一斉授業からの脱却を図ろうとしているが、学習に前向きでない生徒が多く、苦戦している。
- ・生徒入学時の多様な学習歴により、個々の基礎基本の習得状況に差が大きい。
- ・小規模校、少人数なため、それぞれの生徒個別に応じた指導が行われやすく、また自然と協働的な学びにも移行すると感じる。
- ・生徒一人一人の学び方の違いを見極めるのが難しい。
- ・生徒減少により協働的な学びの機会の設定が難しくなった。
- ・少人数クラスを多く設定している。
- ・生徒の授業に対する集中力の課題もある学校で、高校生としての基礎基本のコアな学びも必要である。
- ・不登校生徒に対する学びの保障が課題
- ・大学入試との乖離の大きさ
- ・個別最適のレベルが低位であり、基礎基本の徹底という範囲に収束してしまう。

《分析・考察》

各学校での工夫については、「ICT活用」が回答数124(26.4%)でトップ、次に「授業展開(特色ある授業等)」が回答数107(22.8%)、それに次いで「教員の指導力向上のための教員研修」が回答数60(12.8%)、「校内組織体制の整備」が回答数45(9.6%)と続いており、他の項目とは回答数に差がある。特徴的な取組については、ICT活用のなかで業者における学習支援ソフトの利用が多くみられ、各生徒の個別最適な学びに大きな役割を担っている。また、総合的な探究の時間に協働的な学びを取り入れる場面が多い。課題としては、個別最適な学びと協働的な学びとを一体的かつ往還した学びとしてではなく、それぞれが別々に行われていることが挙げられる。それは、教員の意識の低さや、教員不足からくる業務量の負担、またICTの活用は必須という認識はあっても家庭の経済的な負担や学校設備の遅れ等が要因となり、新たな学びの確立が進まないこと等が考えられる。

Ⅲ おわりに

現行学習指導要領は今年で実施3年目を迎える。全日制の課程においては全学年での完全実施となる。今年度の調査研究は、昨年までの調査項目のうち「探究的な活動の充実」を残し、令和5年6月に閣議決定された第4期教育振興基本計画において重視された方向性を踏まえた調査項目を新たに立てて研究を実施することにした。これにより、現行学習指導要領への全国的な取組状況や経年変化を見据える一方で、これからの教育課程における課題を明確にし、学校現場が苦慮していることを知り、課題解決に向けた来年度の調査研究の方向性を探ることができた。なお、今年度も経年変化の前提となる調査対象校の概要は、設置者、課程、進学希望率すべてにおいて昨年度とほぼ同様であった。

今回の調査で経年変化を分析した「探究的な活動の充実」について概観すると、「工夫していること」として新たに設けた質問項目である「オ、生徒の活動の充実のための外部機関・人材の活用」と回答した学校が全項目回答数のうち22.7%と高い数値であった。これは全回答校209校中の157校であり、全体の75%にあたる。同様な取組や工夫は、昨年までの質問項目では「イ、授業展開（特色ある授業）」の回答にほぼ含まれていたであろうことを考えても、昨年の回答数は18.5%と同調査項目中で最も高い数値であったものの、今年度の方がその広がりがうかがえる。一方で、その課題と解決に向けた取組の記述回答からは、「教員の負担と指導力の差」「生徒の主体性が育っていない」「調べ学習にとどまり深い探究活動になっていない」「学年、担当任せ」「外部の支援に頼っている」などの記述が見られ、特に「組織的な取組」や「体系的なカリキュラムの開発」「進路の関連性が薄い」「時間的確保と評価方法の不明確さ」等に課題が残る現状が見える。これは、全国的な傾向として、外部機関や人材との連携によって探究的な活動の充実を図る動きが広がっている一方で、その学びの質的な向上に向けた様々な課題に直面している学校も多くみられる現状を物語っていると考えることができる。来年度は、更に質の向上に向けた課題解決への取組について踏み込んだ調査・研究を検討したい。

今年度の新たな調査項目「ICT等の活用による学び」「文理横断・文理融合教育」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」について、項目ごとの取組状況と課題及びその解決策については個々の項目における分析・考察を述べたが、ここで少し補足させていただきたい。まず「ICT等の活用による学び」については、昨年度は「1人1台タブレット端末」についての環境整備・事例・課題等の調査を実施したが、今年度は生徒の「活用による学び」に焦点を当てて調査を行った。その結果、好事例の共有や相互授業の見学など校内において活用が広がりを見せている学校がある中で、生徒がICTを活用しながら学ぶ学習活動の推進に関して多くの課題が見えてきた。「文理横断・文理融合教育」については、大学等の学部学科の区分や進路選択等と関係し文理分けが固定観念化している現状から、いかに柔軟に充実を図るか、その道筋はまだ暗中模索の段階と思われる。そのような中で、教育課程や授業展開等の具体的な記述から今後の方向性を示唆してくれる事例を見出すことができる。「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」についての取組と課題も、ICTの活用による個別最適な学びは進んできているが、家庭学習等を活用した反転授業の実施など、個別最適な学びと協働的な学びを往還させる工夫や、授業における個別最適な学びと協働的な学びの「一体的充実」については、義務教育段階に比べ高等学校段階における実践事例はまだ少ないのではないかと感じた。

来年度の調査研究の方向性については、今回の調査で「課題」として挙げられた内容を深掘りできるアンケートとし、新たな課題も含めた、解決策を提案できるものとなるよう検討したい。

結びに、御多用の中、短い期間でのアンケート調査に迅速かつ丁寧に御協力いただいた全国209の対象校の校長先生方、並びにアンケートの調査依頼に御尽力いただきました各都道府県の教育課程研究委員会御担当の校長先生方に、心より感謝申し上げます。教育課程研究委員会では、今後も生徒・教員・保護者・地域社会のウェルビーイングの推進に向けてチャレンジし続ける全国の校長先生方の参考となるような調査研究を実施してまいりたいと思います。